旅人国定龍次
たびにんくにさだりゅうじ
上
山田風太郎
講談社

旅人 国定龍次(上)
山田風太郎
© Futaro Yamada 1989

1989年5月15日第1刷発行

発行者——加藤勝久
発行所——株式会社 講談社
東京都文京区音羽2-12-21 〒112
電話 東京(03)945-1111(大代表)
Printed in Japan

講談社文庫
定価はカバーに
表示してあります

デザイン——菊地信義
製版——豊国印刷株式会社
印刷——豊国印刷株式会社
製本——株式会社大進堂

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫第一出版部あてにお願いいたします。 (庫一)

ISBN4-06-184469-5

講談社文庫

旅人 国定龍次（上）

山田風太郎

講談社

目次

野州　七
上州　三三
江戸　六六
総州　一一七
甲州　二二〇
駿・遠・参　三三八

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

旅人（たびにん）　国定龍次（くにさだりゅうじ）

（上）

野州

一

元治元年春、筑波山に攘夷の旗あげをしたいわゆる水戸天狗党は、討伐にきた幕府の大軍と戦いをはじめた。

いくさはやがて那珂湊に移ったが、攻防半歳、ようやく敗勢におちいった天狗党の生き残り約一千は、いったんは常陸(ひたち)北端の大子(だいご)村までのがれたが、そこで玉砕するよりは、いっそ長駆上洛して、いま禁裏守衛総督として京にある水戸出身の一橋(ひとつばし)慶喜公に、われわれの旗あげの志をきいていただこう、と軍議を決し、十月末、決死の上洛を開始した。

決死の――というのは、当然幕軍の追撃はあるだろうし、道程の諸藩もむろん無事に通さないだろうと予想したからだが、これが意外にもたいした支障はなかった。幕軍に追跡の余力はなく、諸藩もまた恐慌状態におちいって、この叛乱軍の通過を見まもるばかりであった。ところどころ散発的に、見てくれだけの抵抗の気勢を見せた藩もあったが、たちまち一撃のもとに蹴ちら

された。

敗れたりとはいえ、なにしろ一千の天狗党なのである。これが鉢金をつけた鉢巻をしめ、陣羽織、どんすのはかまに朱鞘をぶちこみ、鉄砲を持ち槍を持ち、十数流の旗をひるがえし、百数十頭の馬をともない、十数門の大砲を車にのせて行軍する。当時の北関東に、これに刃向かえる者はちょっとない。

事実、天狗党は歌った。――

「水戸の天狗に刃向かうやつは
出らば出てみろ、ぶっ殺す」

無用の殺人掠奪は禁じられていたが、それでも戦闘態勢にある男たちの荒あらしい集団心理から、また実際上の補給の必要から、ゆくところどころで禁制が破られたことはいうまでもない。

彼らは野州――いまの栃木県――を、北東から、南西へななめに横切って、無人の境をゆくがごとく進んできた。

天狗党が、その野州南西端にちかい葛生という山中の宿駅に着いたのが十一月十日のことだ。

明日は渡良瀬川をわたっていよいよ上州へはいるが、さてどの道を通るか、と、その夕刻、幹部たちが軍議をひらいていると、村はずれに歩哨に出ていた隊士の一人がかけてきて、上州からきた二人の男が、嘆願のことがある、と申しておりますが、と伝えた。

「なんでも、上州大前田の栄五郎とやら申す爺で、もう一人はつきそいらしい若い男です。追い返しましょうか」

「なに、大前田の栄五郎？」

村でいちばん大きな農家の、家族はみんな一室に追いこんで、前庭に面した広い部屋に、総大将の武田耕雲斎、副将の田丸稲之衛門、軍師山国兵部をはじめ、十人ばかりが円坐を組んだ中の一人が、その名をきいて首をかしげたのだ。

「草堂さん」

と、呼びかけたのは、若いが事実上の天狗党の中心人物藤田小四郎であった。藤田東湖の子で、このとしまだ二十二歳だ。

「上州大前田村の栄五郎なる男をご存知なのか」

「有名なばくち打ちの親分だときいちょりもすが」

「ばくち打ちが何のためにきたものか。――そんなものに会ってもしかたがない」

「しかし、天狗党の中にも少なからずばくち打ちがまじっちょるが、これがそこらの浪人隊士諸君より、けっこう働くじゃごわせんか」

と、草堂は笑いながらいった。

年は三十なかばだろう。みな陣羽織をつけている中に、この男だけ、さかやきをのばし、黒紋付によれよれのはかまをはいて、いかにも浪人然とした姿だ。口ひげをはやし、みるからに豪快濶達の風貌の持ち主であった。

この天狗党はむろん水戸侍が主軸だが、三分の一くらいは浪人や農民や博徒などがまじっている。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

「そこらの浪人隊士よりやくざのほうがよく働く」といったけれど、この草堂万千代という男自身が浪人なのであった。言葉でもわかるように、薩摩の人間だという。

彼はいった。

「上州で有名なばくち打ちの親分が、どうやら乾分一人だけをつれて、殺気みなぎる天狗党の本陣に何のために乗りこんできたのか、とにかく話をきいてやってもよかごわせんか」

「草堂さんがそういうなら、会ってやろう。つれてこい」

と、藤田が庭の隊士にいった。隊士はかけ去った。

まもなく、七、八人の天狗党にかこまれて、その二人の男がやってきた。

二

草堂が立って、少しひらいていた障子を大きくあけた。

往来をへだてる数本のけやきの大木の葉はすべて落ちつくして、それでも風があるので枝はみなゆれて、あかあかとななめにさした夕日も、その中にひしめいている隊士たちの剣光槍影も、ことごとく砂けぶりにけむっている。

老若二人だが、この季節にどっちもあいみじんの袷だけで、羽織はおろかじゅばんもつけていないようだ。それどころか、素足にわらじをはいただけだ。若いほうは尻っからげしている。こっちは長脇差を右手に持っているが、老人のほうは無腰である。

老人のほうが大きかった。背丈は六尺にあまり、巨木といった感じがする。年は七十をこえているだろう。白髪まじりだが、やや長目のあから顔に、尻あがりのふとい眉、大きな眼――造作からいえばおっかない容貌のはずだが、ふしぎにおだやかな印象を与える。何にしても一見しただけでただ者ではない。

これが縁先の地べたに坐った。――

「龍」

と、ふりかえって、乾分の若い者に、

「おめえも土下座しろ」

と、いった。

龍と呼ばれた乾分は何かいいかけたが、老人の眼におさえられて、同じように地べたに坐った。

が、老人が平伏しても、彼は横をむいているだけであった。――いま老人のほうが背が高いといったが、この若者がふつうより背が低いのだ。が、力士のようにふとって、しかも筋肉質で、童子みたいにあどけない顔だちなのに、常人の倍くらいある大眼玉からは、殺気のようなものがかがやいていた。

老人が顔をあげて、

「お目通りおゆるし下すって、ありがとう存じます。手前、上州勢多郡大前田村に住む栄五郎と申す爺でございますが、天狗さまにおねがいのことがあって参上した次第でございます」

と、あいさつしたとき、縁側に立っていた草堂万千代が、ふいに、
「ちょっと待て、それよりおはんのつれてきた乾分はなんちゅうやつじゃ？」
と、妙な問いを投げかけた。
「へえ、龍次と申しやすが――」
栄五郎がめんくらった顔で答えると、草堂は、
「おいっ、千乗坊はそこらにおらんか」
と、けやきの向こうをながめやって、さけんだ。
「おらなんだら、だれか探して、千乗坊をここへ呼んできてくれ。――」
龍次は狐につままれたような表情で、
「お、おれが、どうしたってんでえ？」
と、つぶやいた。
「さて、大前田の栄五郎親分。……お前の願いとは何じゃね？」
草堂万千代はむきなおって、あらためてきいた。
「ええ、それでは申しあげます」
栄五郎は口をきった。
「つかぬことをおうかがいいたしまするが、これから天狗さまはどちらへおゆきでござえましょうか？」
「むろん、上州へはいる」

「上州といっても、この葛生村の先の田沼から道は二つございます。一つは西へいって足利、一つはちょっと南の梁田の方角へ――そのどちらをお通りでございましょうか？」
実は、そのことについて先刻から軍議中であったのだ。
「それをきいて、どうしようっちゅうのか」
「まことに怖れいったお願いでございますが、足利をお通りになることはなんとかごかんべん願いてえんで。――」
「たわけっ」
と、怒号したのは、栄五郎のすぐうしろに棒を持って立っていた陣羽織の侍であった。下総浪人の笠原彦十郎という、天狗党中でも矯激できこえた男だ。
「尊皇攘夷の旗をかかげて西上しつつある天狗党の進撃路を、虫ケラのような博徒ふぜいが指図しようというのか！」
「指図なんて、大それた……ただ、お願いに参ったので……」
「うぬはそれを足利藩からたのまれたのか」
「いえ」
栄五郎の顔に、ちょっと狼狽の波が立った。
「そうでなければ、一介のばくち打ちがそんなことを申しこんでくるはずがない」
と、笠原はいいつのった。
「そんなことを、ばくち打ちに申しこませる足利藩とはなんだ。天狗党を何と考えておる。そう

か、思うに足利藩は、天狗党への献金をおしんで、うぬのようなばくち打ちに依頼したものにちがいない」

実はいままでの道程、ゆくさきざきの諸藩は、天狗党に抵抗するどころか、何千両かの軍資金を提供して、自分の藩を通らないように哀願したのである。

「即刻帰って、足利藩にいえ。足利を通ってもらいたくなければ、重役みずから一万両持ってこいと。そうでなければ、明日、天狗党は足利をまかり通る。――下郎、帰れっ」

と、わめくと、棒をふりかぶって、老人の肩をなぐりつけた。

いや、なぐりつけようとした。そのとたん、ばすっという凄まじい音がその脇腹から立って、笠原彦十郎はのけぞりかえった。

ねじまわすようにした胴から滝みたいに血がしぶいて、彼はあおむけにころがった。

地上に坐ったままの乾分、龍次という男が斬ったのだ。坐ったまま――いや、片ひざたてて、うしろになぎはらった長脇差に、夕日が真っ赤な光をはねていた。

数瞬、一帯はしいんとした。庭のまわりにひしめいていた天狗党たちも、まるでフィルムをとめたように静止した。

あろうことか、千人を数える天狗党の本陣で、その隊士をぶった斬るやつがあろうとは。

まっさきに動いたのは、その張本人であった。

ぱっと鞠みたいにおどりあがると、独楽みたいに一回転して、

「上州一の大親分、大前田栄五郎を棒でぶんなぐろうたァ、と、とんでもねえモグラ野郎だ。モ

グラだから斬った！」
と、絶叫した。
「さっ、くるなら、き、きやがれ、モグラ天狗ども！」
そして、大地に両足をふんばり、長脇差を八双にかまえた。
はじめてわれにかえり、八方の天狗党が地鳴りのようなうめきをあげ、どっと動き出そうとした。

三

そのとき、
「ま、待てっ」
と、大音声でさけんだ者がある。縁側に立っていた草堂万千代であった。片手をあげて、
「おう、千乗坊か。こっちへこい！」
と、さしまねいた。
さっき隊士が呼びにいったのはその男か。——坊主あたまにねじり鉢巻をしている。墨染めの衣のそでを背にまわして結んでいる。そして刀を腰に横たえ、おまけに槍までついている。まるで僧兵だ。
が、この場に及んで天狗党たちが、「——お！」と眼を奪われたのは、その千乗坊といま凶行

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton